

トラン バオ クイン

ベトナム出身／2019～2020 年度奨学生

上智大学グローバルスタディーズ研究科 修士課程

1. ご縁を大切に

父は、人間関係のことについてこのようによく言います。「近いけど割と遠い。遠いけど割と近い」。父は 8 人の兄弟で、他の家族の全員はベトナムの北方にあるハイフォン市に生まれ育ちましたが、父だけが仕事の関係で南方のホーチミン市に移住し結婚しました。他兄弟たちとの 1700Km 以上の距離や、父自身の仕事も忙しいにも関わらず、父は大家族について話してくれたり、毎年の夏休みの時に私たちの兄弟をハイフォンに連れて行ったりすることに力を注いでくれました。また、叔父さんと叔母さんもよくホーチミン市に遊びに来てくれました。そのような機会がなければ、私たちの大家族は絆を築くことができなかったと思います。2020 年は新しい 10 年の始まりとなり、過去 10 年間を振り返ると、私と日本との繋がりも同じく「近いけど割と遠い、遠いけど割と近い」ように考えられます。父の言ってくれた言葉がいつも心の中に存在していて、日本の留學生活で勇気ももらって立ち直れたことがたくさんあります。

10 年前の私はまだ 15 歳で、中学生の 4 年生です。その時の私にとって、日本は日常生活において親しい国でした。毎朝日本製の「ホンダ」というバイクの後ろに乗って父に学校まで送ってもらったり、母親にドラえもんの漫画を買ってもらった時は喜んで読んでみました。他にも、高校受験の試験に東日本大震災の問題が出されました。それらが初めて日本の文化や社会に触れる機会でしたが、日本が遠く離れている地であるため、それ以上の機会もなく、将来日本に留學するとも想像していませんでした。

私にとって一番大きなきっかけは、高校 2 年生の時にベトナムで通っていた学校で日本の高校生と交流したことです。言語の壁があるにも関わらず、日本のことを高校生たちは一生懸命話してくれました。2011 年の東日本大震災の話が特に印象的でした。甚大な被害があった地域において、多くの方が協力する国内ボランティア活動を推進したことを説明してくれました。それがきっかけで、幼少期からの日本に対する興味に加え、日本人の性格に対して尊敬の念を感じるようになりました。そして、私は立命館アジア太平洋大学のアジア太平洋学部で 4 年間勉強してから、現在所属する上智大学院への進学を決めました。

日本での生活も 6 年目に入って、日本は「遠いけど近い国」になりました。学校や課外活動で日本人の友達と交流するとともに、日本の生活や文化に対しての知識を深めることができました。留學のなかで記憶に強く残っているのは、2016 年度の熊本地震時の日本人寮長の対応方法です。緊急に応急対応をしなければならないその時にも、常に率先して他の寮長とハウレンソウや役割分担をし、対応計画を立ち上げました。地震の際、寮生の世話は最優先だと考え、すぐに皆と集まり、避難まで落ち着かせるようニュースの内容を日英で伝えました。その後、他地域へ避難しなかった寮生と寮で残り、彼らの精神的な頼りとなるよう

努めました。この経験を生かし、私は、どのような事例でも適切な判断をし、柔軟に乗り越える力を意識し始めました。今までのすべての与えていただいた機会に、心より感謝の気持ち一杯です。また、機会を待つだけでなく機会を作るのも大事だと思い、自分からの積極的な行動をしていこうと心掛けています。

2. 奨学生期間中にできたこと・将来計画

2019年度坂口国際育英奨学財団の奨学生に採用されたことは、私の大学生活のうえで大きな支えとなりました。私の進路を応援してくれる公益財団法人坂口国際育英奨学財団の皆様、心から感謝を申し上げます。

勉強の面では、努力してきた2つの事を述べさせていただきます。一つ目は、転換期であった2018年を無事に乗り越えたことです。2018年9月立命館アジア太平洋大学での4年間の勉強が終わり、2018年10月から上智大学の大学院に入学しました。専攻では、比較的視座を重視し、日本社会の文化と思想を捉えるために、経験がない分野にも挑戦しました。日本近代文学の授業はその一つでした。吉本ばななや村上春樹といった作家の短編小説を読むのが初めてで、内容も文章スタイルも非常に新鮮でした。二つ目は自分の研究についてです。私は技能実習制度、特に在日のベトナム人の実習生に興味を持つようになりました。オリジナルデータに基づいた研究を行いたかったので、2019年6月から約6か月にわたりデータ収集を行いました。ベトナム人の実習生を中心にインタビューを行い、広い範囲のオリジナルデータ収集に基づいた卒業論文を書くつもりです。なぜなら、インタビューにおいて、直接関わることで、彼らの意見や経験を深く理解できるからです。具体的な私の研究テーマは実習制度についてです。日本に住んでいるベトナム人の実習生が、日本に来る希望動機、または、どのように仕事と日常生活を過ごしているのかといった内容を書くつもりです。さらに、このことに対して日本政府はどのような取り組みを行っているかという事も研究したいです。今の段階では、23人の実習生とのインタビューが終わり、データ分析をしているところです。指導教授のSlater先生は質的研究の専門家なので、先生と都度相談していきたいと思います。

そして、坂口国際育英奨学財団で私は多くの勉強になり、素晴らしい人々にお会いすることができ、実際に成長しました。東京に引っ越してから、楽しいことも逃げたくなるほど辛いこともありました。勉強や課外活動で忙しくなった時に、財団の東洋文庫見学やチャリティコンサートなどの行事に参加させていただいた後、日本文化を深く理解したことで気分転換が図れ、自分の研究に専念することもできました。私のように他校の留学生の友達ができ、交流を通じて彼らの考えを知ることによって自分の知識が広がっていきました。それに、思考を整理する時間が取れて生活のバランスをとることができました。思い出せば、坂口国際育英奨学財団がくれたのは「ファミリー」のような支えだと言っても良いです。交流会などが終わった後も、財団から自分の研究に関するニュースや情報を送って頂いたり、個人的な面談で私の考えや不安をきいて頂いたことは一生忘れられないことです。

私は6ヶ月後卒業しますが、10年後までに、国際機関で国際人材育成作りの事業を手掛

けたいです。勉強や仕事の目標を達成するには「未来」ではなく「今」が重要だと思います。
「未来」もいずれ、「今」になるので、「今」できることを全力でやっていきたいです。